

आयुस्、あーゆす

(発行) 京都文教大学・京都文教短期大学図書館
京都府宇治市植島町千足80

『エモい古語辞典』

京都文教大学・京都文教短期大学図書館長
総合社会学部・教授 (植民地主義、帝国研究) 遠藤 央

最近、従来とは趣のことなる辞典、辞書がいくつ出版されている。ネット全盛の時代でことばが痩せてきている反動ではないかとも考えられる。そのなかで、『エモい古語辞典』堀越英美 (朝日出版社 2022) を紹介してみたい。

前書きには、「好きなキャラをエモく表現するために感受性を爆上げしたいから、爆エモな語彙を知りたい」というマンガ好き中学生に頼まれたことから、企画がスタートした、と説明されている。ネットの影響が甚大であることがすぐにわかる。しかし、前書きの最後は「エモさにふるえても語彙力を喪失したくない。むしろ語彙力でエモさを増幅させたい。これはそんな人のための辞典です」と結ばれている。

目次を紹介する。第一部は天文で、時間、季節、宇宙、気象にわかれている。第二部は自然で、生

物、植物、元素、色、第三部は人生で、感情、人の営み、第四部は物語で、神話/歴史、怪異、中国、仏教、禅、第五部は言葉で、ことわざ、二字熟語、四字熟語、近世語、雅語、となっている。

たとえば、人生の項の最初は恋に関する語彙が集められている。最初は「ゆかし」で、心がひかれる、慕わしい、知りたい、と説明され、例として「恋しとよ君恋しとよゆかしとよ 逢はばや見ばや見えばや」作者不詳『梁塵秘抄』があげられている。

二字熟語の言葉遊びでは、「黒犬のお尻 (くろいぬのおいど)」では、「尾も白くない」=「面白くない」のかけ言葉、ということばが紹介されている。

知らない言葉が多く、きわめておもしろいが、実際に使用できる言葉はそれほど多くはないだろうと思う。(えんどう ひさし)

私のすすめる3冊 (私の推薦図書)

ライフデザイン総合学科ライフデザインコース 准教授 (調理学) 福田 小百合

◎ 「別冊うかたま 伝え継ぐ日本の家庭料理シリーズ」

日本調理科学会 (企画・編集) / 農山漁村文化協会 2019~

日本各地で昭和35~45年の食生活を聞き書きした料理が紹介されています。地域の人々が次の世代以降も残して欲しいと願っている料理について、レシピや地域の歴史や風土、料理のいわれなどがまとめられていて、写真もとても素敵です。私も京都府の家庭料理の聞き書き調査に参加しました。

◎ 「おうちで作れる実験スイーツレシピ お菓子+化学=おいしい&楽しい！」

Sachi_homemade (著) / 翔泳社 2022

可愛く編集されていて、眺めるだけでも楽しい本です。料理は科学なんだなと感じますが、読みやすく、難しくありません。おいしく、上手にお菓子をつくるポイントがわかる本です。きつとお菓子作りがたくなります。

◎ 「学べるお菓子レシピ 理数系スイーツ」

太田さちか (著) / マイルスタッフ 2022

理数系とありますが、計算はできません。ケーキを人数分に切り分ける、長方形の生地からいろいろな形を切り取るなど、この本を楽しく感じたら、同じシリーズの「学べるお菓子レシピスイーツサイエンス」もおすすめ。

(ふくだ さゆり)

読書の楽しみと授業への活用

元総合社会学部・教授（国際金融・海外直接投資・国際通貨問題・外国為替） 三浦 潔

子供のころから本を読むのが好きだった。但し、世の中には月に10冊も20冊も読むという読書量を誇る人が居るが、私はそういう類の読書好きではない。読む冊数はむしろ少ない方だろう。気に入った本は前のページに戻って読み返すタイプなので、時間がかかる。「精読」というと聞こえはいいが、目から入った情報を仕分けて整理する脳の働きの遅いだけのこと、なんの自慢にもならない欠点だとあきらめている。もともと読むスピードが遅いのに加えて、そんな風な読み方をしているから、読んでみたい本の量に比べて、読了した本数は圧倒的に少ない。ならば、日々の生活の中で空いた時間を読書に活用しているかということ、そうでもない。電車やバスを使う通勤時間では、最初に新聞を読み、次にビジネス誌に目を通した後、ようやく本に取り掛かる。それに、スマホでゲーム（数独が好き）をしたり、ウォークマンで音楽を聞いたり、ときには居眠りすることもあり、読書の優先順位は高いとは言えない。

ここまで言う「あなたは本当に本を読むのが好きなのか」と質問されそうだ。確かに私は、何をあいても読書を優先するということはしない。いわゆる本の虫では決してないが、本が身近にないと何となく落ち着かなくなる、そういう類の本好きである。

音楽を聴くとか、絵画を観るとか、映画や舞台芸術を鑑賞するといった趣味や、スポーツや身体を動かすことは、それぞれなにがしかの効用があると思う。一方、読書することは人間にとってもう少し根源的な意味、あるいは価値を与える、人間にとって必要不可欠な、というと大げさになるが、重要な役割を担うもののひとつだろうと思って、私は自分に合ったペースで本を読んでいる。

私の研究室には、私の専門領域である経済学分野の著書や学術書、授業用の教科書や参考書、各種の報告書が多く積みあがっている。これらの中で、私の担当科目の教科書や参考書、それに授業の教案作成に役立つ本を3冊、ここで紹介してみたい。

① 1冊目：池上彰氏の著作

授業で使う教科書は受講する学生の学力レベルを考慮して選ぶため、選定に苦労することが多かった。そんな中で、読みやすさを重視した池上さんの著書には何度か助けられた。池上さんは読者の属性と立ち位置に配慮した具体的でわかりやすい解説を心掛ける人で、それは彼がNHK時代に携わったテレビ番組「週刊こどもニュース」から基本的に変わらない。私はゼミの教科書として「池上彰のやさしい経済学 1しくみがわかる」（日経BPマーケティング）を何年か使った。また、学生への接し方―目線の置き方など―についても彼の著作から多くを学んだ。

② 2冊目：岩井克人氏の著作

岩井さんの「会社はこれからどうなるのか」（平凡社）と「会社はだれのものか」（平凡社）から、法人の起源と、法人組織の1形態である株式会社が本来的に具備する公共的性格について強い示唆を受けた。私が担当した科目「企業論」の授業で企業の社会性を論ずる際の論拠として参照した。

③ 3冊目：佐藤優氏の著作

1970～80年代にかけて戦後の経済成長の果実を日本社会が享受できた時代に大学で学び、ビジネス界で生きてきた私には、経済的格差と政治的分断が進む今世紀の世界の様相をどのように理解すべきか苦慮してきた。「資本論」を解説した佐藤さんの著書を通して、私はマルクスによる資本主義の分析を知り、現在の世界で拡大する経済格差や不安感の広がり背景を理解するヒントを得ることができた。「いま生きる「資本論」」（新潮文庫）、「「資本論」の核心」（角川新書）がそれにあたる。

読者の中で関心を持たれた方々には、読んで後悔することが少ない書籍としてこれらをお薦めする。

（みうら きよし）